

「もう少し、やりたいな」というところでやめておく

実際に漢字学習をはじめてみると、次から次へと新しい漢字を覚えていくお子さんの吸収力の素晴らしさには、おそらくお母さん方も舌を巻かれることと思います。

しかし、ここで注意しなければならないのが、教える側のほうが熱中しすぎて

「この調子なら、もっと新しい漢字を覚えられるはず」

「もう一回だけくり返して、今日やった漢字は完全に読めるようにしておこう」

と、ついついやりすぎてしまうことです。これは教育熱心な方ほど陥りがちな“落とし穴”とすることができます。

ところが、これは漢字ゲームや絵本の場合も同じですが、お子さんが飽きけじめたり、疲れてきたことに気づかずに推理やりやらせてしまうと、楽しんでやっていた漢字学習も次第に苦痛になってきてしまいます。ですから、「腹八分目」を心がけ、お子さんが「まだもう少し、やりたいな」と思っているくらいの頃合を見計らって切り上げるようにしてください。そうすれば、お子さんも「漢字って楽しいな」という気持ちをもち続けることができますし、「早くまたお母さんと漢字で遊びたいな」という意欲も白然と生まれてくるものなのです。

教える人自身が楽しむつもりで

また「ここまでできたら、を買ってあげる」と、もので釣ったり、教える側の一方的な都合や気分でやったり、やらなかったりする、ゲームでいつもわざと子どもに勝たせてあげる、といったことも極力避けるようにしてください。

教える側が必要以上に子どもに媚びて漢字を押しつけようとしたり、逆に面倒臭そうにやったりしていると、子どもは敏感にそれを察知しますから、漢字が少しも楽しくならず、自ら学ぼうという意欲や、考える力も伸びてこないのです。

まず自分自身が楽しむ この単純なことが、お子さんと漢字学習を進めていくうえでの、いちばんの成功の秘訣ひけつなのです。

もし「漢字で遊ぼう」と誘ってもお子さんが乗ってこないようなときは、無理じいするのではなく、お父さん(あるいはお兄ちゃん、お姉ちゃんなど)とお母さんと漢字カードを読んだり、ゲームなどをやってみるといいでしょう。みんなが楽しそうにしている姿を見れば、お子さんだって「僕も」「私も」と、きっと加わりたくなるはずです。

教え込まずに子どもが自分で気づくのを待つ

最初は、どんどん新しい漢字が読めるようになる、ということを単純に楽しんでいた子どもも、さまざまな漢字に出合っていくうちに、その字の形にも一定のルールのようなものが存在することに気づきはじめます。

もしお子さんが「蟻や蝶には、同じ“虫”っていう字がついてるね」と自分で発見したり、はじめて見る漢字を「これは“魚”っていう字がついてるから、魚の仲間かな」と推理したりするようになったら、そのときは「すごい、よく気がついたわね」と心から誉めてあげてください。なぜなら、これはイメージをそのまま丸暗記してしまう右脳だけでなく、論理・分析によって考える左脳も成長しはじめたこと、言い換えれば、自分で考える力が育ってきた証拠だからです。

ただし、こちらのほうから「よく見てごらん、みんな“虫”っていう字がついてるでしょ」と、決して先回りして教えないようにしてください。

他から与えられた知識は記憶に残りにくいだけでなく、本当の意味での考える力はついてきません。子どもは、自分で発見するからこそ喜びがあり、それが自ら学んでいく力にもつながっていくものですから、結果を急がずに温かい目でお子さんの成長を見守ってあげてください。